

# 農産FAX情報 第1号

令和元年5月15日

発行：ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

## 1 秋まき小麦

### (1) 止葉期追肥の目安

- 融雪が平年より早まったため、幼形期は4/28日頃に迎え、平年より13日早くなりました。こま目には場確認を行いましょ。
- 茎数が多い傾向です。追肥の窒素量が多いと以下の心配があるため、今後の施肥管理に注意してください。
  - たんぱく値が許容値を越える場合がある
  - 倒伏の危険が高まる
  - 止葉が垂れやすくなり、下葉での光合成が阻害される

表1 止葉期窒素施肥目安

止葉期追肥の効果	窒素施用量	施用時期
容積重、原粒たんぱく及び千粒重の向上 (有効茎数 550 ~ 650 本/m <sup>2</sup> 程度が目安)	2 ~ 4 kg/10a 程度	5月中旬後半~ 5月下旬頃

(止葉期：全茎の40~50%の止葉が1枚下の葉の葉鞘から伸びきった時期)

### (2) 病害防除の留意点

- 赤かび病菌のニバーレによる『葉枯れ症状』の発生が見られる場合
  - 同じ病原菌の紅色雪腐病が多く発生したほ場では、必須防除の前に臨機防除を実施する
- 下葉に赤さび病の発生が多く見られる場合
  - 止葉抽出期~穂ばらみ期でも防除を行う
- 生育には場格差がある場合
  - 茎数が多いほ場では、植物成長調整剤のエスレル10の散布を検討し、倒伏軽減に努める

不明な点はJA又は普及センターへお問い合わせください

表2 赤かび病防除を中心とした防除体系例

	防除時期	薬剤名	使用倍率	使用回数	使用時期 収穫前	注意事項
臨機	出穂期迄	ベフラン液剤25	1,000~ 2,000倍	3回以内 出穂期以降は 1回以内	14日前迄	ニバーレによる葉枯れ症状対策。※注1 赤さび病には効果なし。
必須	開花が始まった時期	シルバキュア フロアブル	2,000倍	2回以内	7日前迄	うどんこ病、赤さび病にも効果あり。 ※注2
必須	前回防除の 7日後	ベフトップジン フロアブル	800~ 1,000倍	出穂期以降は 1回	14日前迄	※注1
臨機	天候等に応じて	チルト乳剤25	1,000~ 2,000倍	春期以降は 3回以内	3日前迄	1,000倍使用が望ましい。 ※注2

注1：イミダゾリジン酢酸塩を含む薬剤(ベフラン等)の総使用回数は3回。但し、出穂期以降の使用回数は1回以内。

注2：耐性菌の出現を避けるため、DMI剤(シルバキュアフロアブル、チルト乳剤25)の総使用回数は2回以内とし、連用は避ける。

## 2 てんさい

(1) 畦間の除草や土壌の通気性・排水性を良くするため、中耕作業を行いましょ。

※株元までの土寄せは、根腐病の発生を助長するので注意してください

(2) てんさいの生育や雑草の発生にはほ場間差がある場合は、ほ場毎に管理しましょ。

※除草剤を散布する時は、ほ場状況に合わせ、適正に使用してください

## 3 ばれいしょ

(1) 雑草の発生が見られた場合は、早めに中耕作業を行いましょ。

(2) 培土作業を行い、雑草対策と地温の上昇に努めましょ。

(2) 病害防除の目安

疫病は萌芽後の温度と湿度によって初発時期が予想できます(FLABS：疫病予察システム)。

また、気温18℃前後の多湿条件で蔓延します。

※今後の気象経過に留意し、予防的防除に努めて下さい。

## 4 豆類

(1) は種時期の目安としては以下の通りとなります。

大豆	： 5月20～25日	小豆	： 5月20～30日
金時類	： 5月25～30日	手亡	： 5月25～30日

(2) ほ場の土壌水分が高い場合、発芽不良や苗立枯病・タネバエ発生等の原因となります。

地温が上がり適湿となるのを待ってから、は種作業を行いましょ。

(3) タネバエの発生要因と回避対策

(発生要因) ①牧草地跡や有機物施用ほ場跡地

(回避対策) ②上記ほ場では、は種を避けることが望ましい

③やむを得ずは種する場合は、薬剤の粉衣・塗沫や播溝施用により被害を軽減に努める

(4) 除草剤使用のポイント

① 豆類の除草剤は使用適期が短いため、散布時期や出芽の状況を確認し、薬害を発生させないように注意しましょ。

② 土壌が乾燥している時の土壌処理は、薬剂量は変えずに必ず散布水量を多くしましょ。

**農薬使用は適正量を守り、生産履歴は忘れずに記帳しましょ！**

**農薬散布時のドリフトに注意！**